

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

増

鏡

岡
一
男
校
註

朝日新聞社刊
日本古典全書

岡 一男(をかかずを)

明治三十三年福井市生。大正十三年早稻田大學文學部卒業。文學博士。早稻田大學名譽教授。主著「竹取物語評釋、道綱母、源氏物語の基礎的研究、源氏物語事典、平安朝文學事典、日本古典全書・大鏡等。

日本古典全書

「増鏡」 岡 一男校註

昭和二十三年十月二十五日初版發行

昭和四十九年三月三十日第十三刷發行

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社(東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九

州市小倉區砂津・名古屋市中區榮)

定價 八四〇圓

目次

解 說

三

一、歴史文學としての増鏡の地位……………三

二、書 名……………五

三、作 者……………五

四、著作年代……………八

五、増鏡の諸本、特に古本と流布本について……………二

六、増鏡の文藝形式とその傳統……………一六

七、増鏡の史觀と文藝的價值……………二五

八、註釋・評論の文獻……………三八

系 圖

四

梗 概

五

凡 例

六

本 文

空

目次

序	六五
第一 おどろの下	六九
第二 新島守	七九
第三 藤衣	一〇九
第四 三神山	一一三
第五 内野の雪	一二〇
第六 おりある雪	一二四
第七 北野の雪	一三〇
第八 飛鳥川	一六六

第九 草枕	一八九
第十 老のなみ	二〇三
第十一 さし櫛	二二三
第十二 浦千鳥	二四四
第十三 秋のみ山	二五三
第十四 春の別れ	二六〇
第十五 むら時雨	二七〇
第十六 久米のさら山	二七七
第十七 月草の花	二八二

増

鏡

岡

一

男

解 説

一、歴史文學としての増鏡の地位

増鏡は大鏡系統の歴史物語であつて、いはゆる「鏡物」と稱せられる一類の文藝に屬する。大鏡、水鏡とあはせて三鏡と呼び、さらに今鏡を加へて、四鏡と稱することもある。

大鏡は大體鳥羽天皇の頃に出て、文徳天皇から後一條天皇の萬壽二年までを、ついで高倉天皇の頃今鏡が出て、後一條天皇から高倉天皇までを、ついで後鳥羽天皇の頃に水鏡が出て、神武天皇から仁明天皇までを物語つたが、このつぎに來るのが増鏡で、文治二年後鳥羽天皇の御即位から始めて、元弘三年（正慶二年）後醍醐天皇が隱岐から京都に還幸なされるまでの十五代百五十一年間の編年體の歴史物語である。

もつとも、増鏡の序によると、藤原隆信の「いや世繼」といふのがあつて、高倉・後鳥羽兩天皇の御代のことを記し、今鏡と増鏡とのあひだの橋掛りとなつてゐたとのことであるが、それは早く減んだ。その缺を補うたのが、近世の荒木田麗女の「月の行方」で、高倉・安德兩天皇時代の事蹟を敘してゐる。なほ

麗女には「池の藻屑」の著があつて、増鏡の後を承けて、後醍醐天皇の元弘三年から後陽成天皇の慶長八年までの二百七十一年間の歴史を載せてゐるが、この二著は擬鏡體の歴史物語といふべきで、眞正の鏡類に入れるのには、年代が新らしすぎる。また、順徳天皇時代の「秋津島物語」は、水鏡を承けて、鹽土翁しほつちのおきなに天地開闢から神武天皇降誕までの物語を聴く趣向になつてゐるが、實は日本書紀の神代の卷を假名で抄したものに過ぎなかつたためか、餘り流布しなかつたので、普通鏡物のなかに數へられない。また藤原茂範の著した「唐鏡」といふ支那の歴史を伏羲氏より宋の太祖建隆元年まで敘してゐる書もあるが、これは日本の歴史ではないから、やはり高閣に束ねられて來た。それで結局、鏡物といふと、大鏡・今鏡・水鏡・増鏡の四鏡をさすこととなり、そのうちの傑作としては、大鏡・増鏡の二鏡が擧げられる。といふのは、今鏡は、文章は王朝風の優艶な雅語で綴られてゐるが、中心となる人物も事件もなく、對象となつた時代も單調な平安季世であるから、部分としておもしろい箇所があつても、全體としては平板で弛緩してゐるし、水鏡は、また單に扶桑略記を稚拙な雅語に譯したに過ぎないので、後者の闕文を考證する際の資料にはなるが、文藝としての價值は最も低いからである。もし、廣く國文の歴史物語といふ觀點に立てば、これに榮花物語を加へて、榮花・大鏡・増鏡をわが代表的歴史文學と稱することができよう。そして、これをやはり國文の史論の三大傑作である愚管抄・神皇正統記・讀史餘論とあはせて觀るのもおもしろからうし、また和漢混淆體の軍記物語の三大代表作である平家物語・源平盛衰記・太平記と比較しても、啓發

されるところが多いであらう。ことに史學的價值からいふと、榮花物語と大鏡とが、共に藤原氏全盛の世を寫してゐるに對して、増鏡が單獨で、公武對立し波瀾重疊たる鎌倉時代を對象としてゐるのは、ユニークであつて、他に比類がない。

二、書 名

増鏡といふ書名は、序の老尼の「愚かなる心も見えんます鏡古き姿に立ちは及ばで」といふ謙遜した詠と、それに和した筆者の「今もまた昔をかけばます鏡ふりぬる世世の跡に重ねん」といふ激勵の歌から出て、大鏡・今鏡などの書名に倣らつて、「眞澄鏡」すなはち老尼の昔話をそのまま寫した曇りのない鏡、あるいは、鎌倉時代の歴史を明瞭、微細にその眞實相を描いた書物の義であらうが、それとともに前の三鏡に一鏡を増す意味もかけてある。また、増鏡は古く増鑑（應永古寫本）眞寸鏡（看聞日記・椿葉記御草本・親長卿記）ますかゞみ（宣胤卿記）益鏡（親長卿記）ます鏡（前田侯爵家藏永正十八年本）とも記してゐて、宛て字が區區であつたが、近頃では増鏡と書くやうに統一されて來た。

三、作 者

この書の作者に關しては、從來一條冬良説（東見記・本朝通鑑・扶桑集・群書一覽）及びその父の一條

兼良説（指南抄）があつたが、これらの人人は増鏡の成立が確證せられる永和二年より遙か後に生まれてゐるから、夙に屋代弘賢・伴信友らによつて破棄された。また僧慈延は「隣女晤言」で、屋代弘賢はその校本の奥書で、兼良の父である一條關白經嗣説を提唱したが、經嗣は永和二年に十九歳であつて、増鏡の著者であるためには若過ぎる。さらに經嗣の實父二條良基に遡らせた説も彰考館目錄別本に見えてゐて、「増鏡校所藏應永本云、園攝政良基作」と記してある。この應永本といふのは、現存の増鏡の最古寫本である應永九年本（すなはち永和二年本を寫したもの）と一致するかどうか不明であるが、一應その著者とする二條良基について考へてみる必要はある。

良基は、後醍醐天皇が隱岐から京都に還幸あらせられた際、特にお召し出しになり、氏長者たるべき宣旨と都の管領をすべき仰せを蒙つた二條前關白道平の嫡男で、やはり後醍醐天皇に仕へ、妹はその女御となり天皇南狩の後には北朝に志を致し、光明・崇光・後光嚴・後圓融の四朝に歴事し、關白・氏長者・從一位・太政大臣に陞り、後小松天皇の御代に攝政となり、その嘉慶二年に六十九歳で薨じてゐるから、永和二年には五十七歳で、年次のうへからはさしつかへない。しかし、良基は和歌よりも連歌を好んで、菟玖波集・連歌新式・連理祕抄などの著があつて、この方面で有名であるから、増鏡の著者としてはどうかといふ説もあるが、かれは歌道にも思ひを致し、新後拾遺和歌集の假名序も書いてをり、近來風體抄・愚問賢註などの歌學書を著して、近世和歌の古體をうしなつたことを慨嘆し、心の幽玄と詞の洗煉とを主張してゐ

るし、また累葉攝關の家に生まれ、宮廷の事情にも精通し、文獻も豊富であつたらうから、かならずしも増鏡の著者として不適任ではない。増鏡は源氏物語を非常に模倣してゐて、著者が源語をよく讀んでゐたことが知られるが、良基ほどの學者が増鏡の著者程度ほどにも源氏物語に通じてゐなかつたとは考へられないので、この點ではかれを増鏡の著者に推すのに不安はない。また文藻からいふと、かれの遺著の文章のやや雄勁なのと、増鏡の文章の優艶なのと、多少の相違が感ぜられるが、これは女性の筆に假托したからで、増鏡のなかにどうかすると、和漢混淆文が顔を出すのは、その馬脚があらはれたと見てよい。また、増鏡のなかに勅撰集の歴史や歌壇の消息や二條家の内情やが比較的にこまかに述べられてゐるのも、二條爲世の弟子の頼阿を舉用した良基にふさはしい。なほ、増鏡が後鳥羽院の北條氏討伐の決意を示された「おどろのした」に始まつて、後醍醐天皇の建武の中興を描いた「つき草の花」で終つてゐるのは、武家に反感をもつ者、あるいは大覺寺統に傾倒してゐる者の著になるからだといふ説もあるが、正中の變が勃發して、後醍醐天皇の討幕計畫が發覺した條に「故院後宇多おはしまししほどは、世ものどかにめでたかりしを、いつしか、かやうのことも出で來ぬるよ」といつた時人の評をひき、獲麟の卷を「つき草の花」と名づけてゐるのは、そのうつろひやすいことを示してをり、新田義貞が、足利尊氏の子の義詮の四歳なるを大將軍にして義兵を擧げたなど記してゐるのは、足利幕府に媚びを呈してゐる觀がある。護良親王らの御還俗に對しても、幾分皮肉の眼で見えてゐるところがある。また、持明院流の後深草上皇や光嚴天皇に對

しても、決して悪意は持たないで、かへつて謳歌してゐる。これらの點から考へて、良基を増鏡の著者と
してかならずしも妥當でないとはいへないと思ふ。あるいはさきにもいつたとほり、良基が増鏡の著者と
なるほど源語に通曉してゐたか疑がはしいと思ふ人があるかも知れないが、「おどろのした」にあるやう
に、秦何某といふ御隨身さへ、源氏には通じてゐた時代である。良基ぐらゐな學者が、増鏡程度に源氏物
語をこなされないことはない。殊に増鏡の源氏物語の引用のしかたは連歌的なところがあつて、當時の連
歌師の聖典が、また源氏物語だつたことも參考すべきである。

ところが近年、和田英松氏・中村直勝氏・荒木良雄氏らによつて、それぞれ二條爲明説・四條隆資説・
丹波忠守説が主張されて來たが、いづれも根據薄弱で、そのうち四條隆資は「すみぞめの色をかへつ」
と増鏡の卷末に最も手きびしくやりこめられてゐるし、丹波忠守は建武の中興後まもなく歿してをり、二
條爲明は後光嚴天皇の貞治三年に新拾遺集編纂の途中薨じてゐて、共にそれが私の考へてゐる増鏡の成立
年代の遙か以前であるから、にはかに賛成しにくいのである。それで私は、ここでは假りに塙本奥書に従
つて、松本愛重氏や坂井衡平氏らと共に、増鏡の著者を、二條良基としておく。

四、著作年代

つぎに増鏡の成立年代について述べると、この書が元弘三年六七月頃をもつて獲麟としてゐるから、そ

れ以後のものであることには疑ひない。なほ、序の二月の嵯峨の清涼寺の涅槃會における老尼の物語だとする著者の意圖によると、翌建武元年以降の書に擬してあることも明らかである。また、この校註書の底本とした尾張徳川家藏の古寫本の奥書には、

永和二年卯月十五日

この本、女房のうつしがきにて侍るを、そのままうつし侍るほどに、如法不審なることども侍り・いとど僻書もおほく侍らむ。よき本をたづねて、靜かになをし侍るべし。

應永九年六月三日うつしをはりぬ。

といふ識語があるから、増鏡が遅くも永和二年四月十五日までには成立してゐたことが知られる。それで、本書成立の上限は建武元年であり、下限は永和二年であつて、その間四十二年のあひだに著作されたことは疑ひがない。ところで、文保初年の二條富小路新内裏移御を述べて「近きこと人みな御覽ぜしかばなかなかにて止めつ」（うら千鳥）といひ、元徳三年の北山行幸について「この中に御覽じたる人もおはすらん。うけたまはらまほしくこそ侍れ」（むら時雨）などといつてゐるのは、本書を建武ころのものとするにふさはしい。伴信友は、比古婆衣卷六において、増鏡に南北朝對立の意識の出てゐないところから、兩朝對立の形勢が確然としない以前に置かうとするのであるが、これは解釋のしやうで、近藤瓶城のやうに「信友大人は、北朝以前の書の様にいはれたれど、京師を復したる、高氏ひとりの功の様に、義貞

の家を高氏が末家の様に、鎌倉攻めを高氏が子をもりたてて兵を擧げる様にかけるも、大塔の宮の復飾を意にみたぬ様に書けるも、自ら高氏が地をなせるかとも見ゆ。かの人、世を得ぬ先のふみとのみも定め難くなむ」(史籍集覽校正本巻尾)と反對にもいへる。ことに巻末に、

誰にかありけむ、そのころ聞きし、

墨染の色をかへつ月草のうつればかはる花のころもに

とあるのを見ると、「そのころ聞きし」の語によつて、この書の獲麟の正慶二年は、その執筆當時から相當年月を経てゐる趣きが知られ、「月草のうつればかはる」といふ歌は、建武の中興がまもなく瓦解したことを示唆してゐるやうに思はれる。もつとも、本書の著者を從來の解釋のやうに南朝に甚深な同情をよせてゐた者の作とすると、後醍醐天皇の隱岐還幸をもつて終つてゐるのは、暗に南朝の天子がふたたび吉野から歸京される日を期待する心からとものとれるし、巻末の歌は、それとなく、いまの北朝の榮華もうつるぞと示唆したとも見られよう。

それに和田英松博士が「増鏡の研究」(改造社版日本文學講座所収)で指摘されたやうに、「久米のさら山」に、光嚴天皇の皇子たちがあまた三條の御腹にお生まれになつたことを記してゐるが、これは建武・延元以後のことであるから、本書が延元三年(曆應元年)以後に成立したことがわかる。

なほ、これにつけ加へて、私は「さしぐし」の巻の、つぎの言葉に注意したい。それは、老尼が龜山院

の後の新陽明門院の御行跡を語つた後に、

「さのみかかる御ことどもをさへ聞ゆるこそ、もの言ひさがなき罪、さり所なけれど、よしや、昔もさることありけりと、このごろの人の御有様も、おのづから輕きことあらば、思ひゆるさるるためしにもなりてんものぞと思へば、遠き人の御ことは、今は、なにの苦しからんぞとて、少しづつ申すなり」と、老尼うち笑ふもはしたなし。記者「いづら、このごろは、誰かあしくおはする」と問へば、老尼「否否、それはそら恐ろし」とて、頭をふるもさすがをかし。

といふ問答のあつたことを記してゐるところである。これによると、増鏡の執筆當時に、どなたか新陽明門院のやうなふしだらな皇妃がをられたことがわかるが、いま大日本史の「后妃列傳」によつて、建武以降永和以前において、その例を求めると、北朝の後光嚴院の後宮にただ一つある。すなはち、同書に、

後光嚴院、晩に權大納言藤原資名が女を召して、これを幸し、命じて後圓融院の保母となし、二位を授け、呼びて二品の局といへり。二品の局、自らその寵をたのみて、すこぶる不法多し。かつて北面の土藤原懷國と私通し、請ひて備前守に拜す。懷國、勢ひをたのみて同列を凌忽しければ、後光嚴院稍稍これを惡みて、食邑・給人を收めたり。後光嚴院崩じて、僅かに十餘日に及び、懷國害に逢ひ、二品の局も、また外に出でて尼となりぬ。

とある、その二品の局をさしてゐるのではなからうかと思ふ。増鏡の記者が「いづら、このごろは、誰か

あしくおはする」と問うたのに對して、老尼が「否否、それはそら恐ろし」と答へたのは、懷國が勢ひをたのんで、同列を凌忽するといふやうな亂暴者であつたからだらう。それで、わたくしは増鏡を後光嚴院の應安末に成立したのであらうと思つてゐる。二條良基の五十代の初めの著作であらう。

五、増鏡の諸本、特に古本と流布本について

増鏡の最古の寫本としての應永九年本は、上中下三冊からなり、十七帖に分かたれてゐる。これに尾張徳川家本と圖書寮本とがある。これにつぐのが永正十八年本で、前田侯爵家と圖書寮とに藏せられてゐてその奥書に、

此三冊上中三富豐前守入道釋宗觀俗名藤原忠胤所持本也宗觀目式部卿邦高親王有一覽、外題令書給返給云々、可謂面目、

傳子孫莫處聊爾者乎、余逐覽之次、相違所々加筆爲後證記之、

中御門 一位大納言入道春秋
八旬

永正十八曆仲旬春夾鐘天 桑門 乘 光

とあるが、桑門乗光は、中御門宣胤である。この他、近衛公爵家藏本・谷森善臣氏舊藏本・桂宮本は、いづれもこの系統の十七卷本である。この十七卷本は、のちにいふ二十卷本とは異つて、年次の錯亂や、記